



行火 (瓦製)



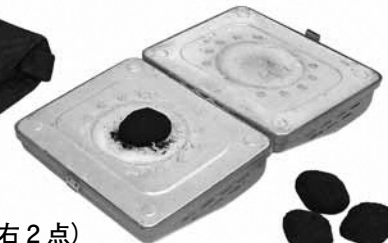
寝炉用太灰



寝炉 (左右2点)



豆炭行火 (左右2点)



豆炭



湯たんぼ

(上2点と右下: 陶製、左下: トタン製)



電気行火 (左右2点)



寄贈資料の中から 寝床で使われる暖房具

今回は、資料の中から寝床で使われる暖房具を紹介します。就寝時に使う暖房具は、もとは医療用で、主として病人やお年寄りなどが使うものでした。

瓦製の行火は江戸時代に生まれ、昭和になるまで使われました。行火の中でも大型で重量があり、写真の資料は、寸法が縦横高さとも25cm程で、重さは8kgあります。上部は過熱を防ぐため二層になっており、炭を熾して火入れに置き、布団の足元に行火を入れて温めます。また、一人用の炬燵としても使われました。

寝炉と寝炉用太灰は、江戸時代に発明された懐炉と懐炉灰を応用したものです。木炭の粉末に藁や艾などの灰を混ぜると、ゆっくり燃える現象を利用したのが懐炉灰で、通気孔のある金属容器に入れて燃やします。写真の資料は大正から昭和初期に普及したものです。燃料が粉末のため、扱いやすい紙筒入りのものが流通しました。寝炉の外側は布張りで、太灰を入れる部分は、裏返っても灰が散乱しないしくみになっています。

湯を入れて使う湯たんぼは、室町時代に中国から伝

わりましたが、一般に使われるようになったのは明治時代からです。金属製や陶製があり、写真のような円筒形やかまぼこ型は昭和初期頃まで使われ、大正時代になるとトタンでつくられたものが登場しました。トタン製湯たんぼの波型は、薄板の強度を上げるための加工で、内部に支柱をたてて補強したものもあります。戦争中には金属が貴重になり、代用品として陶製が普及し、金属製を模した形状のものが出まわりました。

豆炭行火は昭和30～40年代に広まりました。金属容器には石綿などが充填されており、豆炭という、石炭や木炭などの粉末を練り固めた燃料を入れて用います。

筒型の電気行火は昭和初期頃のもので、布張りの木製の覆いに電球が入っています。差し込みプラグが現在と異なるのは、当時、家庭に普及したのは電灯だけでコンセントがなく、電球と差し替えるなどして電気を得たためです。右のかまぼこ型も木製で、昭和20～30年代に普及しました。資料は昭和30年代後半の製造で、熱源はニクロム線を使用し、温度調整が可能です。

駿河湾の漁

金指 貢さんの漁話

個人で行う漁 コショウバイ (1) 刺網

・刺網

網組での漁が行われない冬季に行うコショウバイの中に刺網という漁法があります。この漁法は網の目に魚のエラやヒレなどをからませて捕らえます。海の中層から上層に網を浮かせる浮刺網と網を海底に据え置く底刺網がありますが、金指さんが行ってきたのは底刺網になります。

刺網には、ヒラメを捕らえるヒラメ網、タイを捕らえるタイ網、ワラサを捕らえるワラサ網など、その魚種専用の刺網を用意する漁師もいます。タイやヒラメの他、クシロ（メジナ）など、魚種にこだわらず様々な魚を捕らえるための刺網をコザラシ網と呼びます。魚種にこだわらないコザラシ網の網目は3寸(約9cm)から3寸5分(約11cm)の網を使用しますが、ヒラメ網やタイ網などでは、あまり小さな魚を捕っても仕方がないということで5寸(約15cm)の網目の刺網を使用しています。また、タイは海底よりもすこし高い位置を泳ぐため、タイ網では底を泳ぐヒラメを捕らえるヒラメ網よりも網の丈を高くします。

網を購入してきた時は、網目が閉じてピンと張った状態です。刺網に限ったことではありませんが、このままでは網として使用できないので、網の結び目の位置を調節して網目を開き、網にたるみを持たせます。これを縮結と言います。刺網では魚が網目に突っ込んで暴れた時に網が良くからまるように縮結を強めに入れていきます。特にヒラメアミでは縮結を強めに入れてたるませておかないと、網に当たった時にかみまわすに逃げられてしまいます。

ネ(海底の岩礁)の縁やネの上など餌がある場所には魚がやってくるので刺網を仕掛ける場所となります。刺網は1枚の網を10枚ぐらい繋げて急カーブをつけるように海底に置いていきます(図1参照)。これ

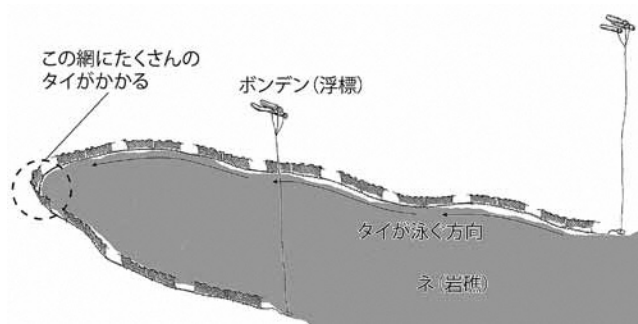


図1：刺網（常設展示パネル：コザラシアミの設置方法に加筆）

を「オリを付ける」と言います。特にタイやイナダでは張られた網に沿って泳ぐ習性があり、まっすぐ泳いだ魚がカーブの所でぶつかり、そのまま網にからまることが多いそうです。

刺網の両端には目印としてボンデンと呼ぶ浮標を付けます。ボンデンには巾着網で使い古した丸形のアンバ(浮子)を使用しました。このアンバには自分が仕掛けた刺網であることを示すため、自分の家を表す記号である家印を刻みました。ボンデンから刺網までの距離が海の深さになりますが、干満の差を考慮して海の深さよりも少し長い縄でボンデンと刺網を結びます。

現在であれば魚群探知機があるため、ひと目でどこに魚がいるのかを知ることができますが、魚群探知機が無かった頃は、漁師が長年培ってきた経験の中でそれぞれの思いの漁場へ刺網を仕掛けていきます。その漁場の位置も現在はGPSなどを使えば簡単に確実に確認することができますが、そのような機械が無かった頃は漁場の位置を確認するためにヤマアワセ(山合わせ)という方法を行いました。まず、海上で船から見える陸上の2点を通る線上にいることを確認します。海上の線は基点が長井崎となり、これと三津の天満宮(天神)、浄因寺、来迎寺を結んだ3本の線があります。そして、もう1点、陸上の大きな木などの目印を組み合わせることで漁場を記憶していました(図2参照)。ヤマアワセで記憶した漁場は父や祖父から教えられた漁場もありますが、自分が新たに発見した漁場もあります。そうした漁場は自らの漁獲に関わるものなので、身内以外には決して教えてはならないものでした。

(話：金指 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市三津在住)



図2：ヤマアワセによる漁場の覚え方

1. 長井崎越しに来迎寺が見える来迎寺合わせの線上にいることを確認する
2. 陸上の目印(例：大きな木)を見つける
3. 来迎寺合わせの大きな木が見える漁場として記憶する(国土地理院発行5万分の1地形図沼津に追記)

地図から見た沼津③「宮町・下河原町と河岸の景観」

加藤 雅功

今回は文化3年(1806)に作成された「本町絵図(その1)」を用いて、狩野川河畔の「河岸」とその後の変遷を見てみたい。絵図の凡例からは夫役の1つ、伝馬役の伝馬屋舗(以下屋敷)は宮町・下河原町ともになく歩行屋敷と船手屋敷が多く、野屋敷は10数軒を数える。宮町は船手屋敷が28軒、歩行屋敷が7軒で、家数48軒を数える下河原町では船手・歩行ともほぼ半々で、図幅内では野屋敷は1軒のみである。道に沿って短冊型の土地割りをなす中で、人足役を勤める歩行役の民家以上に集落を特色づけるのは船手役で、船舶の管理や輸送の任務に当たった点である。

狩野川右岸では「河岸」の景観とともに、重要なのは「川除」である。洪水制御を目的に築かれた「石突き出し」(石出しとも)は、石組みの形状から「甲羅伏せ」とも呼ばれた。絵図ではほぼ100m前後の等間隔で下流側へ斜めに突き出す「出し」は、河岸道の先に構築され、普段は船舶の係留にも役立てられていた。長さ5間から7間程度、幅も5間前後で、規模が大きなものは上部が平らな例もあった。これらの出しのほか、河岸や川に下りる階段、船繋ぎの松、石垣・擁壁等の濃やかな描写は、川に依存する河港の機能と裏腹に、災害常襲地ならではの特異さを反映し、生活に根差した文化的景観を示している。

宮町・下河原町の町名の由来 宮町の命名は、市内でも古くに開かれた西光寺近くに、富士浅間宮(浅間神社)があったことによる。建仁3年(1203)に現在地へ遷座したというが、元の位置は不祥である。西光寺の鎮守として祭られており、境内地の一画を占めていたとすれば、元禄期に天神が位置し、後に不動院(不動堂)が建立された川寄りが想定される。

一方、下河原町の命名と関わる「祇園社」は旧天王社のことで、京都の祇園社(八坂神社)周辺は下河原の地であり、京都にならって付けられた地名という。沼津本町の祇園社は明治の一時期に「下河原神社」と呼ばれていた。疫神の午頭天王を祭った天王社は、祇園社とも呼ばれかつ下河原(下川原)の地名の由来とも関係している。単に狩野川の下の方の河原地帯から名付けられた地名と見るよりも、原野ではない点や開発の古さから神社に因む説の方が説得力を持つ。

明治初期の妙海寺へは不動院に接した妙海寺道(妙海寺門前)からで、絵図でも同様だが、天王道から入って突き当たりに「古表門」の表記がある。古くは妙覚寺にも接した境内であり、天王社に向う「天王道」の側からが合理的である。第六天社(現川邊神社)とに挟まれた一画は曾祖父が居住していた頃の「入り町」で、絵図では家が5軒ほどある。旧道から文字どおり



本町絵図(南半部) 文化3年(1806)

の入り込んだ部分で異形の区画を占めている。天王小路への道でもあり、クランク状の道の先には天王社(祇園社)のほか、耕作地に浜道が3本ある。

なお、第六天社の筋向かいには、狩野川の川岸が直接迫る特異な地点で、絵図では土塁が3か所描かれている。妙覚寺門前でもあり、鉤の手状の道をなしており、土塁や松、山門前の石碑ないし道標、そして直接岸壁となる河岸から、沼津宿の「南見付」の遺構と見ることが出来る。第六天社前の「石突き出し」も長さ5間、横4間で張り出し、河岸への階段も加えて、文化的景観の全ての要素が凝縮している。また戦前の人工堤防の築造以前は、その直ぐ際まで波止場として、定期船の接岸する港の機能が維持されていた。

下河原の生業と耕作地 下河原の千本浜での地先漁業は古くに回遊魚を対象とした地曳網で、地元の天王社に因む網組の「天王網」が、東西に別れたが現在でも継続されている。沼津本町では明治中期に漁業を営む漁家が80戸程度にしか過ぎず、それさえも半農半漁からすでに商業へと向かってしまった。下河原から宮町にかけての住民の生業は、元々魚仲買の「いさば(五十集)衆」が多く、魚町や仲町などから移行して活気を呈していく。大正から昭和初期にかけて、宮町に魚市場が整備されると、港関連の仕事への依存度も高まり、

本町の町場での賃稼ぎも増加した。私の父が沼津魚市場に就職したのもその頃である。

土地利用面を見ると、下河原や本町分の畑地では、養蚕が明治期に盛んとなって、明治20年代から戦前までは狩野川寄りに桑畑が多かった。祖父が農業で生計を立て始めていた大正末期頃には、下河原に郡製糸場も進出していた。昭和10年頃からは耕地整理事業も進められ、戦後の昭和30年代から都市化が進展して普通畑さえなくなり、水田も観音川沿いから千本中町付近まで分散してあったが同様に消滅している。

港湾の整備 大正末期までに県道が延伸して、下河原からは伊豆通いの定期船（東京湾汽船、後の東海汽船）が発着し、営業所のほか、発着場付近には旅館や商店が立ち並んでいた。松崎や下田を巡る船旅の河港の賑わいを、今や想像することさえ困難となった。我が家では祖父の妹が下河原小町といわれ、下田の船長に見初められて結婚したこと、親類が船宿のミナトヤ（港

屋）を営んでいたことなどを思い出す。下河原の町名が一時期「港町」といわれたのも、丁度その頃である。

永代橋以南の狩野川兩岸の沖積地には富士川起源の砂礫層が厚く堆積しており、干潮時に吃水を保てない状況は長く続き、明治以来ずっと「川ざらい」の浚渫が継続した。昭和8年「港湾地区」に掘り込み式の港湾（沼津港）が完成しても、航路の水深を安定的に確保するために御成橋際まで川底の掘削需要があった。砂利を掘削して台船に乗せる「川掘り蒸気」の浚渫船による作業は、狩野川台風の直前まで続いた。

60年以上前に、屋形船の竜宮丸（グラスボート）で夏に内浦方面に繰り出し、納涼と海女の素潜りショーを見学した体験は、少年の日の楽しい思い出であった。当時、観光客を乗せて御成橋たもとの乗船場まで川を上り下りする遊覧船のほか、内浦とを結ぶ貨物船が接岸した「河岸」がまだ残っていたのである。現在では河岸も無くなり、親水性は大きく後退してしまった。

資料館からのお知らせ

白隠禅画展を開催しました



白隠禅画展の様子

本年度も10月28日から11月15日までの19日間、「松籟の宴2017」の一環として白隠禅画展を開催しました。東京新宿の田中温古堂さんのご協力を得て、所蔵されている禅画を展示したものです。本邸跡を会場に開催されている菊華展とともに毎年観覧される方が増えているようです。次回は、白隠禅師の弟子、遂翁と東嶺の二人にスポットを当てて見たいと思います。

歴民講座を開催しました

本年度の歴民講座は、10月21日（土）に、「関ヶ原合戦後の徳川権力の沼津支配」という演題で、講師に柴裕之氏をお迎えして図書館視聴覚ホールを会場に開

催しました。同じ年に生まれ、関ヶ原合戦後に三枚橋城を与えられた大久保忠佐と興国寺城を与えられた天野康景という2人の老臣は、共に77歳でその生涯を閉じました。その末期は時の流れに取り残されたようで、少しさびしさを感じます。



歴民講座の様子

沼津市歴史民俗資料館だより

2017.12.25 発行 Vol.42 No.3（通巻216号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekiminminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp